

# 日本語の基礎能力と応用能力

木村宗男

## 1. 初級教科書のことばについて

日本語を教えているという人から、次のような質問を受けることが間々ある。「せっかく習った日本語が、日本人と話すときにうまくいかない。学校で教える日本語は、実際に使われている日本語とはちがうのではないか。もっと、通じるような日本語を教えてほしい。」と外国人から言われるのだが、これについては、どのように対処したらよいのかというのである。

たしかに、学習の入門期に使う教科書のことばは、まわりの日本人が日常使っていることばが、そのまま取られているとは言えない。そのことは、日本人からも指摘されることがある。日本語を教えたことのない人——というより、日本語教育に理解のない人が、はじめて日本語の教科書を手にとると、「こんなことは私は言わない」とか「これは学生らしくないことばだ」などと言う。そして、「日本語教科書がよくない。もっと生きたことば、現実に使われていることばを教えるべきだ」などときめつけるのをしばしば耳にする。大新聞の外国特派員が外国の日本語教育を取材した記事にも、そんなことが書いてあった。現在、国内・国外で使われている日本語教科書が、すべて完全なものであるとは言えないかもしれないが、教科書と実際に使われている日本語がちがうからだめだと言うのは当らない。

「学生らしいことば」とか「生きたことば」とかいうのは何か。学生同士、それもごく親しい学生同士のあいだで使われることばづかいを指して

言うのであろう。「生きたことば」というのは、単に現在使われているというだけでなく、ある状況のもとで適切に使われていることばということであろう。入門期の教科書によくある「あなたはせんせいですか」「いいえがくせいです」などという問答は、日本の学校では聞いたことがない、生きたことばでない、と言われるのをよく聞くが、「...は...です」という文型を習うための問答としては、りっぱに生きていると言っていいであろう。これから日本語を習い始める外国人と教師のあいだに成り立ちうるコミュニケーションの一つとして生きている。いまさら聞くまでもない、答えるまでもないことがらかもしれないが、このような問答のいくつかが行われたとき、学習者は日本語が通じるという喜びを感じるにちがいない。同時に、それは教える者の喜びでもある。学習者と教師は、わずかの文型と限られた語彙を使って、互いの意思を伝え合い、それが通じたという喜びが、次の学習への意欲をかきたてるのである。初期の学習者の数少ない既習文型と限られた語彙で行わなければならないコミュニケーションの場合と、日本語を母国語とする者の日常生活の場合とちがうのは当然のことであろう。それに個人個人の日常生活が異なるように、使うことばもちがうであろうから、「少なくとも私はこんなことは言わない」という非難は当たらない。「わたしは言わない」の「わたし」には、性別・身分・年齢・環境のちがいがあがる（もっとこまかく分けることもできるが）。それによってことばづかいにもちがいがあがるのが日本語の特徴の一つでもある。それらのちがいをいちいち取り上げて初級教科書に盛り込むことは賢明な方策ではない。

「学生らしいことば」を教えるべきだとか、それを教えてほしいという声も、しばしば耳にする。学習者が学生である場合には、正当な批判であり、要求であるかのように聞こえるかもしれないが、実はそうではない。学習者が現在学生であっても、日本語習得の目的は、学生同士の付き合いのためではあるまい。仮りに、学生同士のコミュニケーションのために、「学生らしい」言い方が必要だとしても、では、学生らしい言い方とは何

かと問いたくなる。思うに、それは、学生としては改った感じのデス・マス体ではなくて、ダ体またはダも使わない言い方であり、学生特有の用語・用法の使用ということであろう。この伝でいくと、「あなたはせんせいですか。」は「きみは先生か。」あるいは「きみ先生？」となり、「いいえ、がくせいです」は「ううん、学生だ。」あるいは「ちがう、学生」としなければならぬことになる。これは批判者も賛成しないと思う。にもかかわらず、「あなたはせんせいですか」と言わないと言うのは、それを言う場合があることに気が付かないということであろう。

批判者は、また、教科書の課が進んでも、学生同士が依然としてデス・マス体で言うのはおかしいと言うのだが、これには理由がある。一般の日本語教科書では、入門期のあいだは対話の文も地の文も、一様にデス・マスで通している。これは、けっしてそれだけが唯一の言い方であるというわけではない。デス・マスとダと同時に教えないとすれば、どちらかを先に教えるべきではない。最も一般的で、どんな場合に外国人がそれを使っても支障を起さないデス・マスを先に教えるという考えからである。

また、「わたし」「あなた」ということばについても、「ぼく」「おれ」「きみ」「おまえ」などをなぜ教えないと言われる。学習者がそれを言う場合は、すでにどこかで習い覚えたというわけであるが、これらも教えないのではない。「わたし」「あなた」を先に教えるというわけである。語研の初級教科書では「ぼく」が23課で、「きみ」が34課で出る。女性を含む学習者を対象として教えるということからも「わたし」「あなた」を先に出すのが妥当であろう。ちなみに、語研初級教科書では、「わたくし」も28課で出てくる。「おれ」「おまえ」は初級では出ない。一般の初級教科書でも出てこない。それは、使い方がひじょうにむずかしいからである。敬語以上にむずかしいのではないだろうか。親密さを表わしたいからとか、相手がそれを使うからとかいう理由で、不用意にそれを使うことは日本語社会では許されない場合が多い。人称代名詞に限らず、外国人は最も普遍的に使われることばから入っていく方が安全であり、コミュニケーション

ョンの目的を果たすことができるのである。学生ことばとか家族同士ないし仲間同士の言い方、ことばづかいなどは、それぞれの内輪の者であることを容認されてのち、はじめて使うことを許される。それまでは、外国人はよそゆきのことばを使う方がよいという考えに立って、基礎学習のことばが選ばれる。あとは、応用学習によって習得できるとするのである。

教科書批判が、教科書を体系として見ないで言われること、批判者が、授業がどのように行われるかを見ないで、あるいは考えないで、ただ印刷されたテキストの一部分のみを見て批判するのは軽率のそしりを免れないと言うべきであろう。

## 2. 基礎能力と応用能力

語学学習には、教養を目的とするものと、実用を目的とするものと、そして両者を兼ねるものがある。日本語学習者の多くは、ことに日本国内の在留外国人や留学生・研修生・研究者の場合には、実用を目的とする者が大部分であろう。実用と言っても、短期旅行者や限られた範囲の業務のために日本語を習う者——店員、ホテルの従業員、航空機の乗務員などの場合は、予想される場面や必要な語彙・表現に限られるが、その他の場合——日本人の社会で生活し、日本語によって業務・修学・研究などを行う者にとっては、将来起りうるあらゆる場合に必要な言語材料を網羅した教材を用意して練習することは不可能でもあり、その必要もない。なぜなら、人間は学習したことがらを他の場合に応用して役立てることができるからである。このように基礎学習によって得る能力を基礎能力、それを応用して発揮する能力を応用能力と考える。基礎能力がなければ応用はできないことは言うまでもないが、応用能力も放置しておいては育たない。応用能力を開発するための学習を行わなければ応用能力は発達しない。実際の言語生活は応用能力によって行われるものである。いや、いわゆる中級・上級の学習そのものも基礎能力の応用によって進められると考えることができよう。

初級教科書は基礎能力を与えることを目的として作成されているのであるから、初級教科書それ自体が実際の言語生活のすべてをカバーするものでないことは言うまでもない。したがって初級教科書の忠実な学習のみでは、実際的な能力としては不十分である。初級教科書を使って基礎能力を与えると同時に、応用能力を開発する指導を行うことが教師の責任である。以上が冒頭に紹介した教師の質問に対する回答である。

### 3. 基礎学習

一般に、初級ないし入門の教科書の作成者が基礎学習に必要なものとして盛り込む言語材料は、基礎文型、基礎的文法事項、基礎語彙である。文字は作成者の考えによって、最初からひらがなカタカナと漢字を交えて教えていくものと、ローマ字によって始めるものと、両者併用のものがある。材料の選択、配列の仕方にも多少のちがひがある。いずれにしても、課ごとに異なる場面を設定して、その中でことばを使うというのがふつうである。設定する場面は教科書によって異なる。たとえば、「...てください」を提出するにしても、Aの教科書では、学校の事務所で学生と職員の対話であり、Bの教科書では、かぜをひいて寝ている学生のへやでの下宿のおばさんと学生との対話といったぐあいである。もちろん、学習者にとって身近な場面が選ばれるが、このような場面を比較して論じることにはあまり意味がない。どちらの場面でも、「...てください」という文型を提示し、新しい単語と、文法事項として動詞の音便形を教えることが目的である。実際の場面では、もっと多くのことばが使われ、より複雑な内容を持った対話がなされるからと言って、教師がそこまで手を抜けることは、教科書作成者の意図した路線を外れることになる。それは応用ではなくて脱線である。

系統立った教科書は、文型の配列を骨格とし、文法事項で補強し、語句で肉付けをするといった手法で編まれている。場面の設定はその方便にすぎない。実際の場面で使われることばをすべて網羅することは考えていな

いので、これを見て物足りないという感じを抱く人があるのは仕方がないのかもしれない。しかし、一般の技術教育の場合でも、基礎教育で行うことは、実地の模倣による基礎訓練と原理・原則の習得であって、けっして実地と同一ではないのである。その差を埋めるのが個々の学習者の応用能力である。

母国語の教育には、基礎学習に当たるようなものがない。就学前に実際に身につけていくのである。外国語でも、教科書などを使わないで、実践的に習得した人の場合、

- ① 実地の個々の場合の学習から入り、
- ② 自ら規則を発見して覚え、
- ③ それを基礎にして応用する、

という経過をたどる。この場合、①から②までの学習に時間を要するけれども、③の能力は高いと思われる。学校での語学教育では、②に相当するものを教師が教科書を使って与えることから始められる。①に相当するものを抜くので、それだけ時間は短かくてすむが、③に時間をかけないと、応用能力がつかない。ときには、授業時間が足りないという理由で、③に相当する作業を省いて、②だけに終ることさえあるようであるが、それでは実際の役に立つ応用能力が育つわけがない。また、②すら十分に習得できない場合がある。それは学習者の素質によることもあるが、教師の責任でもある。

②の学習によって、基礎能力をしっかりとたたき込まなければならないが、それには教師側に周到な準備が要求される。

- (i) まず教材を吟味すること。その教科書の体系を把握することである。

基礎学習は、実際に使われる数限りないことばと言ひ方の一般原則を習得することを目的とするので、精選された材料を順序よく配列した教科書を選ばなければならない。しかし、どんなにいい教科書を使っても、教え方が悪ければ効果は上がらないことを記憶すべきである。

(ii) 各課の材料を整理し、学習者の母語との対比を考慮して、重点を把握すること。

教科書の中には、特定の言語を母語とする者を対象として作成されたものがある。このような教科書は、学習者の母語との対比に基づいて作成されているが、不特定な外国人を対象とする教科書を使う場合は、学習者の母語と日本語との対比に基づく重点的な指導を教師が心がけなければならない。

(iii) 学習者の既習知識と能力を、個々の学習者について把握していなければならない。

次に授業について述べよう。授業に当っては、学習の定着と応用能力の開発を図らなければならない。

学習の定着を図るには、新出材料の提示の方法から考えなければならない。新出文型による文の意味を理解し、新出語句を一つ一つ覚えるということだけでは不十分である。その語句や文が使われている状況を理解すると同時に意味を知るという方法を取らなければならない。状況を理解させるには、初歩ではことばによるのみでは不十分である。実物・絵・写真・模型など視覚的に利用できるものは、なんでも利用するがよい。しかし、進むにつれて、ことばによる説明に置き換えるようにしなければならない。対訳を与えるだけなら1分もかからないことばであっても、状況とともに与えることによって、理解は確実なものになる。

定着のための練習としては、教科書の文の暗記や機械的な文型練習だけでなく、学習者の発想で、新出文型や新出語句を使って言う練習に重点を置きたい。それを可能にするのは教師の巧みな誘導による問答練習である。その辺のことは、本講座第8分冊「対話の指導方法」、第9分冊「対話の指導をいかに発展させるか——自由会話の指導方法——」を参照していただきたい。

初級は基礎教育だからと言って、実際には言わない言い方が許されるというわけではない。学習者にとってはわかり易く、言い易いなどの理由が

あっても、「いいでした」「むずかしいでした」などという言い方は許されない。これらは「よかったです」「むずかしかったです」または、「いい映画でした」「むずかしい試験でした」などのように直すべきである。初級教科書は、実際に話されることばとちがうこともあると、前に述べたが、それは、初級教科書に取り上げられないものが、実際には用いられているということである。一般に使われるかどうかと、首をかしげたくなるようなことばの使い方を許すことは、学習者を实际的な言語生活から遠ざけることになるのである。「いいでした」「むずかしいでした」は、日本人と対話するとき、理解はしてもらえるけれども、そればかり使っていると、日本人が「よかった」「むずかしかった」を使って話すのを聞いたとき理解に困難を感じることであろう。また、「わたしは——」「あなたは——」といちいち主語をつけなければ言えない学習者に調子を合わせて、教師もそのような言い方ばかりしていると、教室外で人称主語のない文に出くわしたとき戸惑うのである。「せんもんはなんですか」「すうがくです」(語研初級1課)のような言い方を早くから基礎教育に取り入れていかなければならない。しかも、この提示に当っては、対訳ないし注釈を与えて理解させるだけでなく、クラスの全員ひとりひとりに、「せんもんはなんですか」と聞いて答えさせる。もちろん、めいめいの専門を言わせる。日本語がわからなければそこだけ外国語でも構わない。さらに学習者同士でも問答し合うという練習を行わせる、というところまでしなければ定着しないものである。

そのほか、例えば、「あなたはいつもこうちゃですか」(6課)「お母さんも大阪かもしれません」(33課)といった文も、対訳だけでは納得しがたいので、いくつかの類例によって、この形を導き出すような問答を行い、理解させるとともに練習させるという手間をかけることが必要である。学習者のなかには、対訳をつけないと安心しない者がいる。教科書によっては対訳がついているものもある。対訳を与えることそれ自身は悪くないが、対訳を与えればすむという考えで、上記の手間を省いてはいけない。



このように、基礎学習の過程で、つねに応用能力につながる指導をすることが応用能力の発達を促すのである。初級の授業では、機械的な文型練習も必要であるが、それは LL 装置があるなら、それを使って行うことにしたい。普通教室の授業では、文型練習で置き換えをやらせるとき、教師がキューを与えて、言わせるのではなくて、学習者に自由に単語を選ばせて置き換えさせるような練習をしたい。その方が学習者の発想を刺激し、自分の選んだことばによって練習できる。それが応用能力へとつながっていくのである。宿題も応用力を引き出すようなものを与え、テストも応用能力を試すようなものにした。

#### 4. 応用能力の開発

応用能力は応用練習によってのみ伸ばすことができる。教科書の対訳による学習のみではけっして育たない。そこで、次のような指導をするように勧めたい。

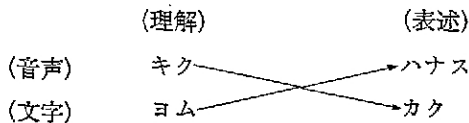
応用練習には、模擬的な応用練習と実際的な応用練習がある。教室で行うのは、ほとんど模擬的な応用練習であるが、教室内でも実際的な練習を行う機会がいくらでもある。授業の進行、宿題の指示、試験の予告、行事の説明、休暇の日程、学校からの通達、以上のことについての学習者からの質問、そのほか、早退・欠席の届、遅刻の理由などがある。教室外に話題を求めれば、気象現象、事件、時事問題など、程度に応じた話題にこと欠かない。このような話題については、学習者の段階、能力、既習知識などを把握している教師でなければ、十分に応用能力を発揮させることができない。教師以外の一般の日本人と話す場合は、いたずらに戸惑い、誤解を生じ、話が混乱し、結局、学習者はフラストレーションを起こすということになる。

模擬的応用練習は、教科書にそって行われる。しかし、教科書の内容とは異なるものでなくてはならない。そこで、先に述べた定着のための練習の場合とは異なる場面設定が行われなければならない。場面設定と言って

も、特別に舞台装置のようなものは要しない。教師と学習者とのあいだに、話題を提供する何ものかがあれば、それによって場面がつけられるのである。最も簡便に、継続的に使えるのは、絵・写真・小道具などである。絵はがきは、絵そのものは教室で全員に見せるには小さすぎるが、普通のはがきや封書などとともに、差出人、差出地、受取人、通信の内容などを話題にすることができる。そのほか、品物、道具類など、教室へ持ち運びできるものなら、随時使用することができる。自動詞・他動詞の導入練習のために、わたしは種々の物を利用し、独自の工作物も作った。それらについては、いずれこの講座で紹介するつもりである。

以上は主として初級の場合であるが、中・上級の場合は、より広範な応用練習を行うことができる。新聞・雑誌の記事、VTR によるテレビの視聴などは実際の練習として利用できる。教科書にそった練習としては次のようなものがある。

中級・上級を通じて、教師の話またはテープなどを聞きながら要点を筆記したり、教材や自分の書いたものを見ながら話すといった練習をぜひ行わせたい。音声による「聞く——話す」という行動と、文字による「読む——書く」という行動とが交錯して行われる言語行動である。図で示せば次のようになる。



実際の言語活動では、このように聞きながら理解した内容をメモに取ったり、メモを見ながら表現形式を整えて話したりということが日常的に行われている。4技能の能力をそれぞれに発達させることが基礎学習であると考えらるなら、4技能の交錯する練習は応用学習に属すると言っていい。このような練習が応用能力の発達を促進するために必要である。受取った手紙を見ながら内容の要約を話したり、会話文を目で追いながら叙述文の形で話したりといった練習は、初級でも行うことができる。

## 5. おわりに

日本語を習っている外国人の中には、学校での成績はいいが、実際に日本人とのコミュニケーションを行うときにはうまくいかないと訴えるものがある。宿題はきちんとやってくるし、テストの出来もいいのに、日本人との対話がうまくいかないと言うのである。反対に、教室外では日本語を使って、日本人とけっこううまく付き合っているのに、学校では成績が芳しくないという者もある。原因は環境にあると言い切れないようである。日本人の家庭に同居している者にも、前者のような場合がある。母国語でもうまく言えない性質とか、特に発音が悪い、聴力に欠陥があるということもあるかもしれないが、前者はいい成績を取ることに満足していて、教室以外の場で応用能力を発揮する意欲に欠けるようである。このような学習者がいい成績を取るという授業の方法、テストのあり方に改められるべきものがあるのではないだろうか。後者の方は、実際の場合でことばを習得しそれを応用する能力はあるが、基礎能力の習得がうまくいかないというわけである。このような者のためには、授業で基礎学習を定着させるような指導方法が必要である。上に述べたのは、両極端の例だが、そのあいだには、やや前者寄りや、やや後者寄りなどの傾向を有する者がある。学習者はどっちかの傾向を有すると言っていいであろう。実際の授業では、基礎能力の定着と応用能力の開発と、双方に気を配った指導が要求されるのである。